

紹介

藤岡 毅『ルイセンコ主義はなぜ出現したか——生物学の弁証法化の成果と挫折』, 学術出版会, 2010年9月, 283p, ISBN978-4-284-10285-8, 定価 3,800円+税

本書の狙いは、1920年代半ばから1930年代末期にかけてソ連で展開した哲学・科学論争の内容をつぶさに検討することによって、ルイセンコ主義が出現した思想的・理論的背景を明らかにすることである。著者は、20年代の中葉から30年代初期に行われた機械論者と弁証法論者の間の哲学論争と、それと密接に結びついて行われたラマルク主義者と遺伝学者間の科学論争を両軸に分析を進める。この論争はこれまで、哲学者と科学者の双方にとっての利害闘争の枠組みの中で理解されてきた。つまり、哲学者の側は、党内での主流の座をめぐる哲学論争の中で、己の哲学教義を科学分野にまで拡大して適用することにより科学の客観性を歪曲した、として否定的な見方をされ、一方の科学者の側は、健全な研究環境を保持するために正統哲学との協調姿勢を装った、という消極的な見方をされるのが一般的であった。そして、ルイセンコがソ連の生物学界を掌握したことは、弁証法的唯物論がソ連科学に悪影響したことの強力な証左とみなされるようになった。著者は論争の変遷をつぶさに観察し、このように図式化された見方を修正する二つの基本的枠組みを提示する。すなわち、1920年代半ばのソ連における生物学の弁証法化の取り組みが、20世紀の進化学の発展に重要な貢献をしたこと、その一方で20年代末にはじまるソ連哲学の転換によって生物学の弁証法化の変質が起り、ルイセンコ主義の登場する思想的基盤が生まれたこと、である(25頁)。このような著者の視点は、イデオロギーと科学の関係が単純に論じきれものではないことを示してくれる。いかにイデオロギーによる外圧が厳しい環境下にあっても、イデオロギーが科学の知的営為に必ずしも悪影響を及ぼすとは限らず、科学者自身がその世界観を取り込むことにより研究活動に肯定的な作用をもたらし得る。こうした観点はイデオロギーと科学の相互作用を論じる際にはとくく見失われがちなのに、以下に本書の内容を紹介していくにあたりここで改めて指摘しておきたい。

序章では、先行研究の紹介に続き各章への問題の割り当てがなされる。ルイセンコ主義の研究はこれまでにロシアをはじめ欧米諸国での膨大な蓄積があり、これら全てを把握するには大変な労力を要するが、ここでは主

要な研究をひとつとり踏まえての充実した研究史が記述されており、日本のルイセンコ主義研究者にとっての大きな助けとなるであろう。

一章では、ロシアにおけるメンデル遺伝学の受容が、ラマルク主義の側にたつ機械論者と遺伝子説を支持する弁証法論者の間における哲学論争と密接に絡み合っていた様子が示される。進化の要因をめぐるラマルク主義者との科学論争がソ連遺伝学の発展にとって不可欠であったこと、すなわち、ラマルク主義への対抗理論としてソ連遺伝学派による集団遺伝学の優れた業績が生まれたことが説明される。これらの一連の業績は1940年代に成立する総合説へと連なるのであるが、同時に進行していた哲学論争の存在がソ連遺伝学派によるこの先駆的な理論形成の原動力となったことが示される(61頁)。20年代のソ連遺伝学論争は、獲得形質の遺伝と自然選択説を融合させた19世紀の進化パラダイムから、遺伝学と自然選択説を結合させた20世紀の新しい進化パラダイムへの転換という科学史の大きな流れに位置づけて、評価することができるだろう(75頁)、という主張からは、生物学の弁証法化を目指す運動が肯定的な結果をもたらしたとする著者の立場が鮮明に浮き上がるとともに、ソ連の遺伝学派の業績を進化学の発展史に再定位しようとする著者の力強い意気込みが感じられる。

二章では、生物学の弁証法化を目指す運動が30年代初頭に「文化革命」の進行する中で挫折し、運動の担い手であったデボーリンの率いる哲学グループが失脚し、替わってミーチン哲学が正統哲学の座を占めるまでの過程が仔細に描かれる。この過程と並行して、デボーリン派を支持した旧世代の遺伝学者の立場が悪化し、替わってプロレタリアートの出自をもつ科学者が登用されるようになると、ルイセンコの登場する社会的条件が整えられる。僅か一年足らずの期間に思想的・文化的環境がめまぐるしく変化する様子は、ソ連史に馴染みのない読者にとって理解に苦しむかもしれないが、臨場感あふれる著者の描写は、読者に「文化革命」当時のソ連の知識人社会を覆っていた興奮と熱狂を覚えさせつつ読み進ませるであろう。

三章では、1930年代の激しい政治気象の下、ルイセンコがソ連生物学界で権力を確立する過程が示される。著者はルイセンコ主義が出現した思想的・理論的条件を軸として分析し、とりわけミーチン哲学の関与を念頭に

置いている。科学をめぐるミーチン哲学の評価基準として「科学の党派性」が繰り返し言及され、理論の客観的内容によらず政策に実践的に貢献できる科学が正しいと解釈されるようになる。科学論争の主張には必然的に主意主義が充満するようになり、農業集団化が強行された当時の危機的な穀物事情の下で、即効性のある品種改良法を提案するルイセンコが頭角を現し始める。1939年10月の遺伝学会議では、ルイセンコ派と遺伝学者との決戦討論が行われ、ルイセンコ派に軍配が上がる。党指導部がこの会議の勝敗判定を哲学者のミーチンに委ねた背景として、同年3月の第18回党大会での大粛清の混乱収拾と愛国主義的なイデオロギーによる国家統合という方針転換があった、と著者はみており、次のように説明する。たとえ自然科学上の意見対立であっても、公認の党のイデオロギー的立場から調整を図り、イデオロギー的な統一(結束)を保とうとした[ミーチンの]試みとも思える(176頁)。ソ連の学問分野中で生物学の混乱の度合いが最もひどかったこと、また、ルイセンコの主張には「ソ連科学の優位性」と「外国科学への非依存」が顕著に表されていたことを考えれば、著者の仮説は一定の説得力をもつ。とはいえ、ミーチン哲学がルイセンコ主義の出現と拡大の要因としてどれほどの重みを占めていたのかは、今後の研究の中で、他の社会的・経済的・政治的な諸要因との間で相対化していく必要があると思われる。

四章では、ルイセンコ派のソ連生物学界支配を決定づけた1948年8月の農業科学アカデミー総会の背景および西側諸国の総会に対する反響が論じられ、なかでも日本の事例が詳細に扱われる。日本におけるルイセンコ主義の思想的・理論的背景に、著者はミーチン哲学の影響が色濃くあったことを指摘する。ソ連の主流派の哲学動向に敏感に反応しミーチンの公式主義の見解に支配された左翼知識人は、ルイセンコ学説を正統マルクス主義に適う学説とみなし遺伝子説に否定的な論文を選び好んで紹介した。その一方で、ソ連遺伝学派の業績の進化学説における革新的な意義を踏まえての紹介はついになされなかったのである。欧米に断固として存在したマルクス主義の視点からルイセンコ学説を批判する立場が日本では微弱であったゆえに、ルイセンコの失脚を弁証法的唯物論の破たんともみなす清算主義的な傾向が日本で生みだされた、とする著者の指摘は正しい。この傾向の現れともとれるが、中村禎里(1967)の総括を最後にわが国では50年近くにわたってルイセンコ主義の問題が学問的に顧みられてこなかった。それだけに本書の出版意義はなおさら大きいといえる。

終章では、ルイセンコ主義が出現した原因について著

者の主張がまとめられるとともに、ルイセンコ主義の問題を検討することが、現代の日本、および科学史研究において持ちうる意義が言及される。

以上、本書の内容を紹介してきたが、ここで評者から若干の批判を加えておきたい。著者は、ルイセンコが台頭した30年代中葉以降の遺伝学論争は、20年代の論争とは本質的に異なっており科学論争になり得なかった、としている(75頁、134頁)。確かに論争でのルイセンコ派の主張内容をみれば、それが遺伝学者に対する政治イデオロギー非難の押しつけであったことは明白である。しかしながら、論争での争点をあぶり出し、それらをめぐる遺伝学者の主張には果たして不備や限界がなかったかどうか、当時の遺伝学の水準に照らして点検する作業を放棄してしまうことには疑問が残る。たとえば、ルイセンコが重視した環境が形質発現に及ぼす作用も、遺伝子の制御によるものであり得ることが、環境に応答した遺伝子の発現機構の詳細が明らかとなる分子生物学の成立以前には、遺伝子説による具体的な説明が困難だったことに言及されてもよかったであろう。このことが1939年の遺伝学会議でルイセンコ派につけいる隙を与え、最終的な局面で遺伝学者がルイセンコ派の優勢を巻き返せなかった理由として検討できないであろうか。さらにいえば、著者は、この論争でルイセンコ派が栄養雑種という当時未解明の遺伝現象を実験的根拠としていたことに言及しているが、この際に細胞質遺伝等のメンデルの法則に従わない遺伝現象が広く検討されるようになったことには、科学論争に資する要素が認められないだろうか。いみじくも著者は、20年代の遺伝学者とラマルク主義者との論争では遺伝子の安定性が争点となっていたことを指摘し、この時には遺伝子の安定性という固定概念を打破した遺伝学者がラマルク主義者を論駁するのに成功したことに言及している(58-59頁)のであるから、30年代の論争についても同様の分析を試みていればなおよかったのではないと思われる。

以上、若干の批判を加えたものの、本書がわが国におけるルイセンコ主義の本格的な学術研究の端緒として大きな意義を背負うであろうことは疑いない。ルイセンコ主義を素材とし、科学と哲学、政治イデオロギーとの相互作用をめぐる深い洞察を行うのに格好の書として、ここに紹介する。
(齋藤宏文)